

あぱっさ

vol.22
アマゾン世界の精霊

*ご住所等ご変更ございましたらご連絡いただけますと幸いです。

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体
Rainforest Foundation Japan
〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20
TEL: 03-5481-1912 FAX: 03-5481-1913
xingu@rainforestjp.com www.rainforestjp.com

HOW TO HELP
 <年会費>大人: ¥5,000 18歳未満: ¥3,000
 ・郵便振替 00140-3-144187 熱帯森林保護団体
 ・三井住友銀行 東京中央支店
 (普)7066247 熱帯森林保護団体
 * 銀行からお振込の方は、
 お名前とご連絡先を別途必ず当団体までお知らせください。

当団体設立から今年で29年目に入ります。1989年5月、何も分からず、ただ情熱だけで活動を開始、対象地域の支援が日本人として初めてだったので、妙な責任を感じ、無我夢中で時間が過ぎていきました。雨季のジャングルで遭難したり、ある時は360°大豆畑のど真ん中でライフルを突きつけられたり、何回か命を落としそうな出来事に遭遇し、もうダメだと正直思ったことも多々あり、心がくじけそうになりました。しかし、アマゾンとその地で暮らすインディオの人々、動植物、神々や精霊さんたちと共に過ごしたジャングルでの2000日以上の日々と、日本で応援してくださる方々から勇気と愛を頂き、今日まで活動を続けることができました。アマゾンの森を焼きその跡地で収穫した大豆を食べている日本人。この星の酸素供給減である森の木が焼ける時に断末魔のような声をあげる音が、耳から離れず、また火だるまになって逃げるアリクイを助けられなかったことなど、悲しいことも沢山見てきました。数年前から始めたインディオの若者による「消防団」の支援事業は森を火から守る使命感に溢れ、未来に光を照らします。世界中が貨幣制度で埋め尽くされ、アマゾンのインディオ社会もその対応策を考えなければならない状況にあります。「養蜂事業」の支援はシングーインディオにとって、市場と流通を確保し外部へ蜂蜜を出荷することで経済的自立が望め、ブラジル社会との共生が可能になり、従属の道を回避できます。インディオの若者が文明に憧れ街に出てしまうこともあります。どこで暮らしていても、誇りさえ失わなければ私は大丈夫だと思います。

最新の科学技術を駆使し、文明の進歩を追い求めている先進国を中心とした私たちの暮らしは、スマホや機械に依存し、便利さという落とし穴に落ちていくように映ります。巷では権力や地位を持つ人間が誤った判断をし、危険な状況が続き憂慮しますが、この混沌の渦に巻き込まれず、自分の立ち位置を定め、アマゾン支援を地道に続けて参ります。(南 研子)

* 32回目のアマゾン視察は8月に予定しています。
 今回はムン・アランテス・ファクトリーの松田ナギさんもアマゾンへ同行します。

南研子著:「アマゾン、インディオからの伝言」「アマゾン、森の精霊からの声」
 の2冊が電子書籍で販売されました。
 現在は「kindle版」のみで「amazon.co.jp」のネット書店でお求めになれます。



「監事を退任するにあたって」

滝島 勇一

監事を10年間勤めさせて頂きましたが、この度一身上の都合で退任させていただくことになりました。思えば10年前、今は亡き柴田敬三さんから「アマゾンの監事をやってくれないか」と頼まれ、中学・高校の大先輩からの命令にも等しい依頼とあって考える余地はなくアマゾン自体をよく理解しないまま引き受けました。ところが内情を知るにつけ、南さんは大変なことをやろうとしているな、しかも命がけで・・・とすぐに感じました。

私は20代のころお金こそ力だと信じて、他人の物まねで町工場を始め、1979年の第二次オイルショックで見事に倒産してしまいました。その間は日本式産業構造ピラミッドの底辺にいたわけですが、その過酷さ・残酷さと言ったら筆舌に尽くせません。「明日の朝までにやってくれ」「お前でもなくてもやるところはいくらでもある」など朝飯前、全く人間性など無視で、象と蟻の係りに抵抗する術はありませんでした。いつかきつとりベンジしてやる。この経験がのちに産業構造の外にある税理士という職業を選ばせるわけですが、その時感じた「儲けのためには下請けの命など全く眼中にない」という資本の冷徹な論理は一生忘れることはできません。これは資本主義の悪しき本質だと思います。

南さんの話を聞き、アルミ缶を一本消費する都度アマゾンの森林が何本も倒されることを想像するようになるにつけ、問答無用の資本家のブルドウザーの音が改めて聞こえる思いでした。南さんはこれに命がけで抵抗している、言うは易く行うは難し、現地入りしたら抹殺されてしまうかも・・・その勇気にただただ驚くばかりでした。

南さんたちの努力の積み重ねと多くの方々のご支援により、現地では、はちみつ等で現金収入を得られるまでになってきたようですが開発優先の資本の論理には抗いがたいものがあると思います。ただいえることは諦めたらそこで終わり、今後私が一緒に歩めないことは大変申し訳ありませんが、南さんの今後のご活躍をお祈りすると共に皆様の変わらぬご支援を心よりお願い申し上げます。

10年間RFJの監事として貴重なご意見を頂いていた滝島勇一さんが、このたび退任し、後任として副島由紀子さんがお引き受け下さいました。理事、監事のみならず、そしてRFJ会員、寄付して下さる方のご協力、ご支援があつてこそ、支援活動が続けていけますこと、常に感謝いたしております。



Tシャツのシルクスクリーンプリントは1枚1枚手作業です

RFJ x MW vol.2
 NEW!!
 コラボ商品の詳しい内容については同封のチラシをご覧ください!



“亀”文様がモチーフのレディースTシャツ

若いメンバーがかわりかわり族のポスター「ペンテグ」をアレンジし、熱きアマゾンからのメッセージを表現しました。



革職人によるオールハンドメイドのレザーアイテムも加わりました



レザーコインケース / カードケース



アマゾン 最新情報

「アマゾンの森と先住民のいま」 下郷さとみ(フリージャーナリスト)

■ 水源の私有化に対抗する「もうひとつの」世界水フォーラム」がブラジルで開催



水系環境破壊への抵抗を訴える先住民族リーダーたち。
photo:Matheus Alves(世界オルタナティブ水フォーラムHPから引用)

3月17日～22日、ブラジルの首都ブラジリアで「世界オルタナティブ(もうひとつの)水フォーラム」が開催されました。同時期にブラジリアであった第8回「世界水フォーラム」(3月18日～23日)に対抗する形で開かれたものです。(＜世界水フォーラム＞ 3月22日「世界水の日」の時期に3年に1度開催される国際会議で、水事業に従事する企業や技術者、学者、NGO、国連機関、各国政府関係者などが参加して、世界で深刻化する水の枯渇問題や衛生問題等について議論が行われる。)

いま世界各地で水資源の私有化・自由化が進んでいます。水道事業の民営化や私企業による水源の占有、それらへの外国資本の参入などの動きです。アマゾン地域では巨大水力発電所建設による水系環境の破壊も深刻です。

これらの問題に危機感を抱く人びとが集った「もうひとつの水フォーラム」には、多くの先住民族も参加しました。森と川に生活の糧を得ている

先住民族にとって、水は生存に直結する問題です。当団体の支援対象地であるアマゾン支流シンゲー川流域の先住民族リーダーたちは、巨大水力発電所の建設により森が広範囲に水没し、また滞留した水の腐敗が魚の大量死をもたらしている現状を訴えました。

いまブラジル国会では、北はアマゾン南部から南はアルゼンチン北部にまで広がる世界最大級の帯水層「グアラニ帯水層」での地下水取水権を自由化・民営化する法案が提出されています。ブラジル国内には飲料や食品の多国籍企業が多数存在し、工場のある地域では地下水の過剰取水によって地域住民が使う上水道に悪影響が出ているところもあります。「もうひとつの水フォーラム」参加者たちは、この法案を後押ししている多国籍企業のブラジル本社前でデモを行い、「水は権利。商品ではない！」と訴えました。

■ 2018年大統領選で先住民族女性リーダーが副大統領候補に

ブラジルでは今年10月7日に大統領選挙が予定されています。ブラジルの大統領選挙は国民の直接投票によって行われますが、保護区に暮らす先住民族ももちろん国民として選挙権を持ち、投票日には保護区内の拠点に設置された投票場で投票が行われます。

各政党では大統領と副大統領を組にした候補を挙げて宣伝が開始され、社会的弱者の権利の擁護や自然環境の保護に熱心な政党「PSOL(社会主義自由党)」は、副大統領候補にグアジャジャラ民族の女性、ソニア・グアジャジャラを推薦しました。パートナーとなる大統領候補は、貧困層の居住への権利を求める運動を全国で展開するNGO「MTST」のリーダー、ギリエルミ・ボウロスです。

ソニアはブラジルを代表する先住民族リーダーのひとり、全国の先住民族の連合組織「ブラジル先住民族連携(APIB)」の事務局長を務めています。また、これまで数々の国際会議にも招かれ出席してきました。映像で見る彼女のスピーチはとても力強く、真摯で聡明な人柄が伝わってきます。

いっぽう、当選有力な大統領候補として世論調査に名前が挙がるのが、保守政党「PSL(社会自由党)」の現職国会議員(下院)ジャイール・ボウソナロです。国軍の大尉出身のボウソナロは、軍政への回帰を望む言動や、女性や黒人、貧困層、セクシャルマイノリティ、先住民族、非キリスト教者など社会的弱者・少数者への暴言が絶えない人物です。文化や社会の多様なあり方や人びとの持つ権利へのリスペクト意識も低く、「先住民族はブラジル社会に同化すべき」「私が大統領になれば新たな先住民保護区は一切認定しない」と明言する同候補の台頭に、先住民族リーダーたちは危機感を強めています。



先住民族としては初の副大統領候補となるソニア・グアジャジャラ。
photo:Nunah Alle(PSOL HPから引用)

■ アマゾンにおけるエタノール用サトウキビ大規模栽培に道を開く法案が国会に提出

大規模農業開発が進むアマゾンでは、開発のための森林伐採に加えて、開発による乾燥化の進行が残された保護区内で森林火災を多発させており、二重の理由で森の破壊が加速化しています。農業開発は主には輸出用大豆・綿花などの栽培(日本も大量に輸入)、また肉牛の牧畜のためのものですが(ブラジル産牛肉は口蹄疫の問題から日本は輸入を禁止しているが欧米諸国や中国に向けて大量に輸出されている)、いま新たに、エタノール(アルコール燃料)用のサトウキビの大規模栽培を可能にする法案が国会に提出されています。

アグロビジネス推進派の議員団は「原生林が既に伐採された後の二次林や荒廃地での栽培を許可するもので問題はない」としていますが、先住民族リーダーたちは、「新たな農地開発推進の原動力となる。これ以上、アマゾンの森を開発の危機に晒すな」と強く批判しています。

1970年代にアマゾンの南側に広がるセラード(サバンナ=熱帯草原)地域で輸出用大豆栽培のための大規模農業開発が始まり、莫大な利益を生み出したその経験がアマゾンでの農業開発へ道を開きました。この歴史を踏まえて先住民族リーダーたちは「新たなマネーを生み出してはならない」と訴えています。



←当団体支援対象地「シンゲー先住民公園」の衛星写真。境界線ぎりぎりまで開発が進んで数千ヘクタール規模の無数の大農場が保護区を取り囲んでいる。
photo:Google Map



↑近年、保護区で多発する森林火災の消火と防止に活躍する消防団。
←シンゲー先住民公園の近郊に広がる大農場で綿花の収穫が進んでいた。この後、雨季に入れば大豆の種がまかれる。
photo:Satomi Shimogo

発はどんな形であれアグロビジネス

2017年会計報告		2017年RFJ事業報告書	
2017年1月1日～2017年12月31日		2017年支援金計・・・10,913,626 円	
<収入の部>		1. 熱帯林保全事業	
2016年繰越金	¥ 6,332,689	熱帯林を自然発火等の火災から守る目的で「消防団事業」を開始して3年目に入る。ここ数年大豆畑、牧場造成、巨大ダム建設、鉱物採掘場等の開発で熱帯林の減少に拍車がかかり、乾季において異常な乾燥化が進み、自然発火等が原因でジャングルに火災が発生し、膨大な熱帯林が焼失していることが深刻な問題となっている。先住民カヤボ族、ジュルーナ族の約50名の若者が中心となりマトグロソ州消防署に勤務するアレックスサンドロ・マリアノ中佐が専門家顧問とし、インディオ若者3名がリーダーとなり、両部族長老4名が相談役とする組織で消火、防火の事業を実施した。	
年会費	¥ 2,195,000	昨年度はこの事業の拠点となる、シンゲーインディオ国立公園の中央に位置するピアラス(外部との監視場所でもある)において消防署を建設、8月から約40日間防火、消火の特別講習が実施された。14集落から招聘された若者はこの間ノウハウを習得し、各集落へ戻り自衛団を結成し、防火を目的とするパトロールを強化し、火災発生時には速やかに消火活動を実施する態勢になっている。この事業により、支援対象地域内で火災発生が生じた場合でも大火に至らず消火したことによりブラジル国内で評価され、インディオリーダーの一人、ホイチ・メトゥディレはブラジリアで開催された熱帯林保全会議等でその成果を発表する機会を得た。ここ数年はこの事業を継続支援していく。この事業に掛かる経費全てを支援している。	
寄付金(企業・個人)	¥ 23,006,511	2. 経済自立支援事業	
物販費	¥ 480,200	周辺の巨大ダム建設を始めとする様々な開発の影響で、支援対象地域の生態系は急激に変化している。未だ貨幣制度が集落内において確立していないが、ここ数年で確実に入ってくる。本来は森の恵みだけの営みであったが、経済的な自立を余儀なくされる状況にある。幸いにもこの地域は豊富な植物群が残り、環境に負担にならない養蜂事業に適していた。外部からブラジル人専門家ウエメルソンを雇い上げ7集落(マチブ、アウエチ、ナフクワ、カラバロ、ワウラ、カマユラ、イアラビチ)総勢約20名の養蜂士に専門的な技術指導を行った。各集落の事情で均一な事業を展開することは難しく、経済的な自立を目的とした場合は市場、流通の確保も視野に入れなければならない。今回マチブが全てには蜂蜜の商品認定証や法的なアソシエーションの登録も必要になってくる。今回マチブが全てをクリアしてブラジルNGO(フンド・カーザ、ISA)から養蜂小屋の建設費を提供してもらった。この地域にしか生息しない針無し蜂の蜜採取は昨年引き続き、本年度の課題として残っている。養蜂事業に必要な機材購入、年間を通し3回現地に赴き専門家の経費等を支援している。	
助成金	¥ 5,071,200	3. 先住民伝統文化継承事業	
(エキスパート福祉支援協会/内田エネルギー科学振興財団/セディナ地球にやさしいカード/三井物産環境基金)		カヤボ族のリーダー、メガロンが発案した昨年のモデルケースの村作りは、協力者であったブラジル人の急死で頓挫してしまっただけで、他の場所探しを余儀なくされた。いくつかの候補地を当たりこの事業の継続を切に願い、移動のための燃料費等を支援した。カヤボ族の各集落では年寄りや伝統文化継承や知恵を次世代に伝える努力を実施している。ブラジル社会において、従属することなく共生をしていくには、インディオの工芸品等の販売を通し外部に理解を求めていくことも重要である。	
利息	¥ 32	4. 医療支援事業	
計	¥ 37,085,632	シンゲー地域の住民が緊急に対応しなければならない状況に陥った時の治療費等を支援した。	
<支出の部>		5. 現地視察経費	
現地支援金	¥ 10,913,626	国際航空運賃、ホテル代、食費、ブラジル国内交通費等。現地調達支援物資購入、先住民集落滞在に必要な備品費。	
他団体賛同・支援金	¥ 15,000	6. 雑費	
役員費(アルバイト代含む)	¥ 4,227,000	海外送金手数料、ビザ発行費、健康診断作成費、ブラジル連邦警察への特別ビザ作成費等。	
家賃	¥ 2,760,000		
通信費(国内/国際電話、FAX、切手、送料)	¥ 515,637		
コピー機、FAX レンタル料	¥ 282,721		
消耗品、事務用品	¥ 129,538		
資料作成費	¥ 165,306		
外注費(販売用書籍、販売物等製作費)	¥ 64,260		
外部委託費	¥ 600,000		
交通費、宿泊費	¥ 169,280		
会議費	¥ 108,521		
備品費	¥ 132,893		
雑費	¥ 114,566		
銀行/振込/両替手数料	¥ 216		
次期繰越金	¥ 16,887,068		
計	¥ 37,085,632		